

2021年2月28日(日)

老球の細道596号

2月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

誰でも、何事も、できないことができるようになることは嬉しい。時にはそのことがきっかけで人生が変わることもある。指導者であれば、自分の関わった選手が、できないことができるようになる瞬間を見ることは至福の一時である。親であれば子どもが、爺であれば孫のその瞬間である。私事であるが、4歳の孫息子が今月ようやく1個のボールでドリブルができるようになった。そしたら、あれよあれよと2ボールドリブルまでできるようになった。わが子の時は待てなかったが、孫の時はできるまでゆっくり待てるようになった。

1・テレビから

◆「毎日がここから」〈NHKインタビュー：車いす陸上の鉄人・伊藤智也〉：若い時に多発性硬化症という難病を患い現在も闘病中。毎日寝ている時に身体がどんどん悪くなっている。朝起きると「毎日がここから」という思いで生きているという。そして今、57歳ながら東京パラリンピックで金メダル獲得のために必死で生きている。

◆「私の最後の祈り。おお私の身体よ いつまでも私を 問い続ける人間たらしめよ」〈NHK：100分de名著：フランツ・ファノン〉：黒人として生まれ、人種差別の問題を死ぬまで問い続けた作家の言葉。コーチも学び続けなければならない人間である。

2・読書から

◆「風車 風の吹くまで 昼寝かな」〈城山三郎著『落日燃ゆ』新潮社〉：昭和の激動期に戦争回避のために尽力したが、東京裁判でA級戦犯として処刑された廣田弘毅の言葉。時代が自分を必要とするまでのんびり待つことも必要なかもしれない。私は「準備して昼寝」。

◆「組織とは一人では成し遂げられないことを成し遂げるためにつくるものであり、違いがあるからこそ、大きな成果が得られる」〈『コーチングクリニック』ベースボールマガジン社〉：今月は五輪組織委員会の森発言から「多様性」という言葉をどれほど聞かされたことだろう。「好きな者同士」や「仲良しこよし」は「グループ」にはなりえても、目標達成を使命とする「チーム」にはなりえない。

3・新聞から

◆「素晴らしい人間に出会うのではなく、人間の素晴らしさに出会う」〈朝日：日曜に想う〉：素晴らしい人間に出会うことはそれほど日常的ではない。素晴らしいコーチ、選手に出会うことも同じ。しかし、1人の人間、選手の中に素晴らしさを探すことを心がければ素晴らしい出会いが日常茶飯事となる。そして探しているうちに自分の心にも光がさしてくる。

◆「仲間を得て、必要とされたら、人は何歳からでも生まれ変わる。そう信じています」〈朝日：ひと：栗原豊〉：この人は誕生日を二つ持つ。生を受けた日と60歳で薬物を断った日だ。7回目の出所後、検事から「回復施設に行け。回復して他の依存者を助けてやれ」と言われ、73歳で定時制高校を卒業。現在薬物依存の施設で支援に取り組む78歳だ。